

## 『孫文と森本厚吉』

## 『Sun wen and Morimoto Koukichi』

浜 田 直 也

### 序 文

森本厚吉（1877～1950年）は、クリスチানের経済学者で社会活動家でもあった。彼は札幌農学校（北海道帝国大学）を卒業後、アメリカのジョンズ・ホプキンス大学に学び、帰朝後母校で教鞭をとった。<sup>(1)</sup> 森本は札幌農学校時代に内村鑑三から影響を受け、基督教に入信し、内村の弟子の新渡戸稲造を師と仰ぎ、基督教の福音の倫理的側面を尊重し、その文化的活用に重点を置いた実践活動を展開した。また彼は札幌農学校の同期生有島武郎と親交があり、その基督教入信にあずかって力があり、有島の農場解放の協力者でもあった。

その森本の社会活動の一つが、教育の男女平等を理念とする女子教育の実施であり、彼はそのため北海道帝国大学を辞任して東京女子高等学院（現在の東京文化学園）を創設している。また、森本は、大正九（1920）年には、民衆への啓蒙機関として文化生活研究会を組織し、民主主義を信奉する基督教徒の出版社であった警醒社に事務所を置き、月刊誌『文化生活』（1921年）を刊行した。<sup>(2)</sup> 同会は顧問に、吉野作造、有島武郎、賀川豊彦が名を連ね、講師に姉崎正治、与謝野晶子ら、二十数名の著名人を招聘し社会的反響を呼んだ。

森本は、文化生活研究会を組織した大正二（1920）年に吉野作造（1878～1933年、東京帝国大学教授）の依頼により、賀川豊彦と共に上海日本人YMCAによる夏期講座の経済学の講師として訪中した。この際、森本は、孫文と会談する機会をもち、その後の、彼の日中問題認識を固めるような影響を受けた。<sup>(3)</sup> 森本厚吉に関する現在の研究は藤井茂氏の評伝『森本厚吉』を除いて皆無に近い。

しかも、藤井氏の評伝も、森本と孫文の会見及び、彼の対中観については触れていない。本稿では、森本厚吉の上海での夏期講座とこの時の行動、さらに賀川と共に実現した孫文との会談について紹介し、孫文研究におけるその歴史的意義について分析することにする。

## 第一章、上海の森本厚吉

森本厚吉は、大正九（1920）年に上海日本人 YMCA の夏期講座の講師として中国に出向くことになる。この訪中は、友人の吉野作造の推薦によって実現したものであり、同行者は賀川豊彦であった。吉野は上海日本人 YMCA 幹事の内山完造（1885～1959年、書店経営者）に夏期講座の講師を依頼されたのであるが、所用が有り森本と賀川を内山に推薦したのである。森本と吉野は互いに基督教信仰をもち、共に大正デモクラシーの啓蒙運動の先駆者として活躍した同志である。当時、吉野は「民本主義」を唱え、森本は「婦人問題」を取り上げて啓蒙活動を推進していた。『吉野作造日記』には屢々森本の名前が登場してくるのである。その森本の『苦悶の経済生活』（1929年刊）には、「上海は八年前講演に招かれて一週間滞在した私にとって思い出の多い都会である。」と誌されている。

ところで、吉野に同行者の賀川を紹介したのは、鈴木文治（1885～1946年、社会運動家）である。二人は同郷出身の東京帝国大学の同窓生で、ともに基督教信仰で結ばれた親友であった。その頃の賀川豊彦は、鈴木に抜擢され友愛会の関西支部代表を務め労働運動を指導していた。帰国後、森本と賀川は交友を結び、賀川は森本の文化生活研究会等の事業を援助している。内山の『花甲録』には二人が夏期講座に招聘された経緯が記されている<sup>(4)</sup>。

上海 YMCA は主事として前田寅治氏を迎えたのであるが、前田主事就任第一の仕事として夏期講座なるものが計画されたのである。…。そして講師については吉野作造博士の推薦に待つことにした。第一回は経済学は森本厚吉博士、文学が成瀬無極博士、社会学が賀川豊彦先生であった。

森本は、上海では時間の許す限り市内を意欲的に見て回ったようである。彼は、上海の日本人が不機嫌な表情をし、街角に遊郭を造り娼婦を置く様を見て失望感を抱いていた。帰国の翌年に刊行された月刊誌『文化生活』創刊号に「私共の主張」を發表し、その中で、彼は上海での日本の施策に疑問を呈している<sup>(5)</sup>のである。

上海は色々各國人がより多く集った処であるが、その上海で私が調査した処によると、歩行して居る日本人は十人の内九人迄は、しかめつたらしい顔をして居る。之に反して歐米人を見ると半分以上はニコニコして歩いて居る。…。植民をするのに待合を作り娼妓を置かなければ植民が出来ないとは何たる事であるか、……

また、森本は、賀川との親交を中国で深め、先述したようにその後の賀川は森本のよき協力者になっていった。森本はわざわざ神戸の貧民窟に賀川豊彦を訪ね、そこでの賀川の貧民への献身的奉仕活動に胸打たれている。森本は貧民窟での賀川の活動を『成長する愛の生活』（1924年刊）の中で回想している。それには次のよう<sup>(6)</sup>にある。

日本一といはれる神戸の貧民窟を案内されたときのことであった。きたないボロを着けた貧乏人が鉢植の花を愛し、その世話をして居ったあの愛心の發現、又は鼻たらしのきたない風をした子供達が、賀川豊彦氏のあとを慕ふて、すがりつく相愛のその光景等は、一生忘るることの出来ない強い印象を私に與えた。

森本の上海日本人 YMCA 夏期講座の実態については、『民國日報』などの中国の新聞等には記載がなく、上海日本人 YMCA の機関誌『上海青年』（1920年9月号）に記されている。それによると、森本の講座題は「現代の經濟問題」であり、講演題は「新婦人の生命」、「生活の改造」、「婦人と文化運動」であつた<sup>(7)</sup>。『上海青年』の「大正九年（自八月十三日至同三十一日）夏期講座集

会及出席人員統計表」には、

森本講座

二十六日	209人	二十七日	226人	二十八日	183人	
三十日	184人	三十一日	172人			計 974人

とある。後半人数は減少しているものの合計数はほぼ千名近くに達し、賀川（1084人）と成瀬（1100人）の講座に総数で大差がない。『上海青年』に掲載された筆名「大陸生」の「森本博士に遇ふて」には、森本が北海道から上海に到着したのが八月二十五日であると誌されている。また、森本の上海 YMCA への返礼文「研究室より一編者宛一」（九月廿二日付）が『上海青年』に遺されている。それには次のように誌されている。<sup>(8)</sup>

今度の旅行日数は、僅かに一ヶ月でありまして、…自分の見学以外に、文化運動として、上海で八回、大連で三回、撫順で一回、奉天で三回、長春で一回、京城で五回、水源で一回、東京で一回、計二十三回の講演を終へまして昨日無事歸任、直に研究室に入り、多忙な身となりました。

森本の中国での活動期間は一ヶ月程であり、上海での講演を終えた後、朝鮮経由で帰国していることが分かる。この帰路は賀川と同じであり、帰日も一日違いで、二人が同伴して帰国したことが推測されるのである。その森本は、上海での夏期講座の期間中に賀川と共に孫文と会談する機会をもっているのである。東京賀川豊彦記念・松沢資料館に所蔵されている賀川豊彦の未公刊草稿に、この時の会談の経緯が記されている。

思い出すのは、大正八年（九年、1920年の誤り）の夏、私が孫逸仙氏をその仮寓に訪問した時のことである。其時私は、今井嘉幸氏の紹介状を持って行った。森本厚吉氏も一緒にいきたいと云われるので、私は支那語の上手な　　と三人で佛蘭西租界莫愛路孫館を訪れた。

この会談は、上記から今井嘉幸（1878～1951年、法律家）が、孫文に賀川を紹介したことによって実現したことが分かる。また今井も、賀川に孫文への紹介状を書いたことを回想録に誌している。<sup>(9)</sup>そして森本は、賀川に同伴を依頼して孫文邸に赴き会談に同席したのである。今井は神戸の労働組合運動における賀川の同志で、大正デモクラシーの「普通選挙運動」の旗手の一人であった。

森本と賀川が、孫文との会談の機会をもった時期については、段雲章氏が『孫文と日本史事編年』において九月と推定しているが、それは実際は八月のことである。<sup>(10)</sup>その根拠は、賀川を寄宿させた上海日本人 YMCA 副理事長松村松次郎（住友洋行支配人）が『上海青年』に掲載した随筆「賀川氏を宿して」によると、「賀川氏は八月十九日正午頃当地に着かれてから同廿八日朝当地を去るまで」とあり、それから会談が八月下旬に行われたことが確定できるのである。<sup>(11)</sup>森本にとって、孫文との会談はその後の記憶のなかでも好印象のものであった。森本は、会談後の孫文の第一印象として、「支那人のうちで私を一番あいさうよく迎えてくれたのは、先年上海で訪ねた故孫逸仙であった。」と誌している。<sup>(12)</sup>

そして、その後の森本は、「研究室より」に日本政府の中国に対する植民地政策を否定する中国・朝鮮問題認識を披瀝している。それは上海での孫文との会談を踏まえての発言であると思われるが、それには注目すべき見解が披瀝されているのである。<sup>(13)</sup>

支那及朝鮮問題に関する印象記は、時を得て公表し御批評を仰ぎ度いと思っておりますが、兎に角「刀剣と砲弾」「強い資本と安い労力」を主として築き上げた我植民地の文化は、母國に於けると同様に、目下行詰まりになって居る事は明かです。今後の発展には根本的に個性の開発に重きを置いて、各自の能率と幸福の増進を計り、以て社會を改造する事が、新時代の切なる要求であると信じます。

森本は、ここで初めて中国・朝鮮に対する日本の侵略政策を批判し、各民族の独立の必要性を婉曲な表現である「個性の開発」を用いて主張しているので

ある。また、彼は『苦悶の経済生活』において、“支那にも民衆の醒める時が必ず来ると信ずる”と中国人民の覚醒を予言しているのである。森本は、貧民窟で賀川に纏い付き子供達の姿に感動しているように教育者であって、人間は平等に個々の能力を持ちそれは教育によって開発され得るものと確信し、中国・朝鮮民族を劣等民族とする差別を否定していたのである。

森本は、彼の著作を見る限り、1920年以後の数度にわたる中国旅行を通して、日本の中国への侵略政策に対して批判を強めていったのである。彼のような中国問題認識をいざうことが出来た知識人が大正期にどれ程いたかと考える時、森本の存在は吉野・賀川と同様に日中友好の歴史のうえで評価されるべきであると思われるのである。

## 第二章、孫文と森本厚吉

森本厚吉は、賀川と同様に吉野作造の推薦で1920年の上海日本人 YMCA の夏期講座の講師として訪中し、賀川と共に上海日本人 YMCA の夏期講座の講壇に立ち、同じ視察経路を経て同時期に朝鮮から帰国している。賀川の帰国は9月15日で、森本の帰国は9月16日と、ほぼ同時に帰国している。訪中の際、森本は、賀川の組合運動の同志今井嘉幸の紹介で、賀川と共に、孫文と上海の仏蘭西租界の邸宅で会見する機会をもった。森本は、それ以前、中国との接点を持っていなかった。彼は中国語を話せなかったが、孫文は彼等に英語で熱く語ったというのである。森本は、その後も孫文を“支那最大偉人の一人”と尊敬していた<sup>(14)</sup>。孫文は、会談の中で初対面の彼等に対して、日本への信頼が裏切られたことと、日本政府と軍閥に対する不信感を吐露し、両国の平和をもたらす為に直ちに不平等条約を撤廃し、軍事的経済的侵略を停止することを忌憚なく訴えている。

その孫文の指摘は、森本と賀川にとって、日本の中国への罪過を突きつけられた様なもので、その話が二人に与えた衝撃は彼等の中国問題認識に大きな影響を与えているのである。

森本は『苦悶の経済生活』において、孫文への尊敬の念を込めて彼を回顧し

(15)  
ている。

今はもう亡き人であるが、孫氏は稀に見る偉人であった。八年前において述べた彼の意見が今日漸く力強くなって来た。上海の支那人が重大視している当面の問題は、要するに、自主権恢復である。外人の特権を廢し、各種の國際關係を平等の地位に立て直そうとするのである。

森本は、孫文の言葉を是として日本が中国に対する不平等条約を放棄して、日中友好に政策を転換すべきであると主張しているのである。この孫文談は、森本一人が聞いたのではなく、賀川豊彦も同席して孫から同じ話を聞いているのであった。

賀川豊彦が、孫文との会談から十数年後に発表した回想録である「興亜と十字架—孫逸仙の言葉—」<sup>(16)</sup>には、以下のように記されている。

私は三年前の旅行の時、ミネソタ大学の学生に講演をしたことがあった。…また私は、嘗って上海で孫逸仙に会ったことがあった。その時孫逸仙の云ふのに日本人で信頼のできる政治家は桂一人だ、…それは私と同行して、俱に話を聴いた証人もあることである。  
(傍線は筆者)

賀川は、1935年に米国基督教連盟の招きで渡米し、協同組合運動等の指導をおこない、ミネソタ大学で講演をしている。話の中で、賀川は「私と同行して俱に話を聴いた証人がいる」と語り、孫文会談の場に同席者がいたことを付言している。文中の「同行して俱に話を聴いた証人」とは、森本厚吉である。賀川は、名前は挙げていないが、さらにもう一人同席した人物がいたという。元上海日本人 YMCA 牧師の池田鮮氏によると、中日組合教会牧師の古屋孫次郎(1880～1958年)も、森本と同様の孫文談を友人に語っている。これからすると古屋が同席していた可能性<sup>(17)</sup>がある。しかし、古屋孫次郎が同席していたと断定する彼自身の手になる記録は存在しない。

賀川は『労働者新聞』(1920年9月17日号)に、帰朝報告「支那から歸って」

を掲載しその中で、次の様に記している。<sup>(18)</sup>

孫逸仙氏に會ふとこんなことを云ふて居りました。日本は朝鮮のためにと云ふて支那と戦い、支那の為と云ふてロシアと戦ったが、それは口實で今日は略奪者になって居る。

一方、森本は『大阪朝日新聞』（1920年9月16日号夕刊）の「孫氏と桂公一  
排日の出発点」において、謎とされていた孫文と桂太郎との密約の内容を日本  
の報道機関に暴露した。<sup>(19)</sup>

上海及び満鮮各地講演中なりし北海道大學教授法学博士森本厚吉氏は十六日朝、關釜聰絡船にて下関に歸來東上したり。博士は上海にて孫逸仙氏を訪ひ最近彼の抱持せる對日感情を聴取し来りたりとて語って曰く、

最近孫逸仙氏の日本に対する態度は、全然排日主義を以て凝り固まり。予と面会せし際の如きも之を斷言して憚らなかつた。彼の語る処に拠れば、彼の親日主義は故桂公在世時代まで、公の歿後日本に彼と俱に時事を談ずるものなきのみならず、其後の對支政策は總て支那を害するものばかりであると明言して、日清日露兩戰後に於ける日本の對支政策を罵倒し是れ領土侵害内政干涉なりとて盛に日本を呪つて止まなかつたが、最後に彼は日支兩國の為に斯くの如き對支政策は却つて日本の將來を誤るものなりと斷案を下し、其の改善策として彼の信条を披瀝し「要するに日本は在來の方針を棄て彼の所謂支那人心、南洋土地の大策…曾ち支那に対しては宜しく領土的野心を棄て、人心の収攬に勵むるを期し、其の代わり南洋に向かつては盛んに領土の擴張を圖るべしと」云ふにありて、彼は其大策の下に日本は遼東半島も臺灣も青島も支那に返還して兩國の平和を實現すべしと極論したるが、彼の此の論は彼の最も親炙せる故桂公より得たるもので、彼は桂公より臺灣も遼東半島も一時的の占領で相当期間經過の後、日本は必ず支那に返還すべしとの言質を取って置いたと言つて居つた。斯くの如く彼は日本を排斥すると同時に最近猛



烈に排英主義を唱え、米國に近寄らんとして居るようであった。彼の勢力は最近非常に衰へたというがまだまだ南方に於いては一の底力ある勢力を握って居るのは事實であるから、彼の排日主義は南方一般に大いなる影響を齎さないでは置くまいと思ふ、云々。 (下關電話)

この森本の談話記事からは、孫文が過去の日本に対する信頼を裏切られ、それが不信感に変わった怒りの現場での口吻さえも感じられるのである。また、彼は同様の談話を『読売新聞』(1920年9月17日号)にも、帰朝談「孫逸仙氏排日を公言して憚らず」<sup>(20)</sup>として発表している。つまり、森本は、日本帝国主義による中国・朝鮮侵略に対する孫文の批判を翌日付の新聞に繰り返し発表しているのである。さらに、森本は、『苦悶の經濟生活』<sup>(21)</sup>において、次のような孫文談を記している。

孫逸仙は更にかうもいった、「日本の對支政策は根本的に誤っている。支那人心・南洋土地を標語とすべきであるのに、日本は軍國主義により支那の眠ってゐる間にその領土を奪取し、支那の人心を取る事に失敗した。故に支那の土地を凡て返却し、もって支那の人心を捉へることが日本の為に最も有利な政策である。その上で支那と協力して南洋の土地を利用するならば、必ず東洋の平和と進歩を實現する事が出来る。即ち日支親善によってのみ兩國が相互の利益を得るのである。領土を掠奪して以て日支親善を説くのは不合理なことである…

この森本の発言の内容が、上海会談での孫文の意見に基づいていることは言うまでもない。

取り分け、森本の告白した孫文の談話で注目されるのは、孫文が大正二(1913)年二月に来日した際、「大正の政変」で失脚したばかりの桂太郎と会談し、今まで暴かれることのなかった密約を結んでいたことである。この密約は、桂と孫の会談に通訳として立ち会った戴季陶によっても公表されることなく、桂の死とともに憶測を孕みつつも知られることはなかった。

ただ、森本の談話が真実であるとすれば大変な問題を提起したことになる。前首相桂太郎が孫文に日清・日露戦争で中国から獲得した台湾と遼東半島を時期が来れば中国に返還すると密約したとは信じ難いことである。もし、これが当時、孫文から公言されたなら、桂は日本国内での政治基盤を弱めて失脚したであろう。また、桂の支持基盤の藩閥・陸軍はもとより、彼が創設した政党の立憲同志会からも離反されたであろう。

しかし、この密約は口約束だけであり正式文書の締結に到っていない。つまり、桂の孫への単なるリップサービスとも考えられるのである。ただ、孫文が桂の口約束を信頼し彼を尊敬するようになったことは疑いないところである。戴季陶の『日本論』には、孫と桂の会談が二回で、延べ時間が十五・六時間に及んだことが記されているが、密約には触れられていない。<sup>(22)</sup>この密約は現在まで疑問とされてきた孫文の桂太郎を畏敬する深層心理を理解するうえで大きなヒントを与えるものであり、桂の謀略が窺える資料の発見でもある。

ところで、孫文がこのような重大な話を彼等にしたことは驚きである。しかし、それは当時の孫文は日本の政権担当者への期待を棄てて、在野の民主主義者との連携に唯一の期待を抱いていたのである。孫文は、会談の行われる直前に開かれたアメリカの議員団の歓迎会で、アメリカの議員達に、アメリカ政府が日中両国の民主主義者と連携して日本に政治的圧力をかけ、日本が中国に押し付けた「対華二十一カ条」を破棄させるようにすべきであると演説している<sup>(23)</sup>のである。

この複雑な問題（對華二十一カ条要求）を詳細に研究して後、我々はこの問題が単純な中國問題だけではなく、単純な外國問題でもあることを理解した。つまり、問題解決の為には、各国各方面の力を集めてそれを團結させる政治的仕事が必要である。そのためにアメリカの政治家が中國、日本の中立的立場を取る民主主義者達と連携して、皆で「對華二十一カ条要求」が廃棄されるように助力し、その実現を前進さすように計画すべきである。

そして、孫文が不平等条約撤廃のための日本人の協力者として期待した、中立的立場に立つ民主主義者の中に、森本と賀川が含まれることは十分予想されるところである。それ故、孫文は、森本と賀川に中国人民の立場からの日本の侵略政策に対する警告を熱く語ったのであろう。

また、森本は、会談から八年後に記した『苦悶の経済生活』（序文は1928年）のなかに、この頃の孫文が従来の民族資本家と秘密結社、軍閥を基盤とした革命路線を転換して、それを労働者・農民からなる民衆の要素のなかに見だし、それに期待しそのための「民心開発」を急務と主張したことを紹介している。<sup>(24)</sup>

先年、上海滞在中、孫逸仙をその寓居に訪れた時、聞かされた二つのことを想起する。彼は頗る流暢な英語でいった、「苦力だって貴い人間である。未だ醒めてゐないだけのことだ。今度、各種の工業が発達して、彼らの労働を有益に利用しうるやうになったならば、その時こそ支那にも産業革命が起るであろう。それはただ時の問題に過ぎない…」と。

ところで、藤井昇三氏は、孫文の1920年10月の宮崎寅蔵宛書簡を取り上げ、「五・四運動」以後の孫文がそれまでの革命路線を自己批判し民衆的要素の中に社会変革のエネルギーを見出していたことと、日本の民衆運動が軍国主義を打倒し日本の民主主義的改革を実現することへの期待を抱いていたことを指摘している。<sup>(25)</sup> このことは、森本が語った孫文の話からも確認することが出来る。孫文は、宮崎への書簡と同様のことを森本と賀川に語っていたのである。森本の語る孫文談からは、この頃の孫文が民族解放運動の指導者から民衆を基盤とする社会革命家に変貌していったことが窺われるのである。

森本厚吉は、孫文から聞かされた桂太郎の密約に驚き、日本の帝国主義的侵略に対する抵抗運動の勃発を通して孫文が民衆を基盤とした革命戦略を決意するに至った経緯を理解したのであろう。そして、彼が中国人民の立場をとる中国問題認識をもつようになったことは疑いないのである。

### 第三章、森本厚吉と中国・朝鮮

森本は、孫文との出会いの翌年に自らが創刊していた雑誌『文化生活』に吉野作造・有島武郎と連名で「私共の主張」を掲載し、日本の朝鮮・台湾・満洲での軍閥支配を非難し“軍国主義で築きあげた我国の文化は不具の文化である”<sup>(36)</sup>と論じている。一方、孫文は賀川と森本に語った日本の軍閥への批判を屢々新聞記者にも語っている。例えば『大正日日新聞』（1920年1月1日号）の「支那人の日本観—支那前大統領孫逸仙談」<sup>(27)</sup>がそれである。つまり、孫文は賀川・森本以外でも日本の侵略主義への怒りを日本人に対して吐露していたのである。日本側でも、吉野作造は二人の旅立ちの前月に東京御殿場の夏期学校で「支那と朝鮮と日本」と題して人道的外交を鼓吹し軍閥を攻撃する講演をしている（『吉野作造日記』<sup>(28)</sup>）。それからすると、孫文にとって吉野が信頼していた森本と賀川は、忌憚なく自分の思いを言い得る相手だったのかもしれない。そして、賀川と森本は、孫文との会談を通じて、吉野作造の境地と同じ中国・朝鮮人民の立場に立つ認識を抱くようになる。そこで森本は「私共の主張」<sup>(29)</sup>において日本の朝鮮併合を批判して以下のように述べている。

あれ程澤山の金を掛けて、非常な苦心をして併合し得た朝鮮でありながら、假令領土は我國のものであっても、今尚ほ其人心を得ることが出来て居ないのである、故にかかる併合は決して成功したと云う事は出来ない。否朝鮮許りではない、臺灣に於いてきへ未だに土人の人心を我國は得て居ないのであります、満洲の我植民地に行っても其通りであり、又米國其他に於いても同様であります。今日迄日本の海外膨脹はドシドシ武力で征服して、土地を獲得することには成功しました。日清戦争でも、日露戦争でも、最近の戦争に於いても、領土を武力で擴張することは出来たが、人間の心を捉えることには常に失敗している。…。軍国主義で築きあげた我國の文化は不具の文化である。

森本は、賀川と同様に孫文の言葉によって日本の大陸侵略の非道を認識し、

上海からの帰国後、日本の帝国主義的侵略政策を批判するようになるのである。その後、彼は日本人にとって曾て正義の戦とされていた日清戦争・日露戦争をも侵略戦争と位置づけ、第一次世界大戦での独領であった山東半島への出兵を侵略に過ぎないと言い切るのである。また、森本は辛亥革命以後の日本政府の節操のない中国懐柔策を痛烈に批判している<sup>(30)</sup>。

之（朝鮮支配）と同じ様な失敗は支那でもやった。支那では何をやったかと云へば先ず支那の中心勢力はこの邊だろうと思って初め袁世凱を助けた。けれども袁世凱がどうしても我々の云うことを聴かない云う段取りになると、南方の革命黨に同情を表した。其後また北に転じて段旗瑞を大に援助したのである。殊に寺内内閣は最も立ち入って段を援けたやうであります。併し段旗瑞を援助すると云ふことは支那の國民の最も厭がる所であります。  
(下点は筆者による)

ここでは、森本は、大隈重信内閣の袁世凱政府への「対華二十一ヵ条要求」及びそれと対立していた広東政府への支援、また寺内正毅内閣の段旗瑞政府への「西原借款」の強制、という矛盾に満ちた道義なき日本の中国政策から生まれた中国人民による排日・反日感情の芽生えを指摘している。森本は孫文との会談と現地視察を経て、森本の中国・朝鮮・台湾・満洲を見る立場は、中国の人民の立場に立つようになっていたのである。また、彼は帝国主義と軍閥の搾取によって蔑まれ卑しめられた中国人民が教育の普及によって必ずや再生するであろうと論じている。彼は『苦悶の経済生活』において次のように断言している<sup>(31)</sup>のである。

支那にも民衆の醒める時が必ず来ると信ずる。…。人種の差別は絶體的のものではない。それは主として教育の如何によって生ずるものである。…。支那人も、そしてそのクーリーたちも醒める時が来る事を豫想し、その立場にたって日支問題を考慮すべきであると信ずるのである。

また、森本は中国人民の覚醒は、外国の衝撃によるのではなく中国人の内部から生まれでて彼等が主体的に成し遂げると考えていた。彼は、ソ連の中国への影響には否定的であり、『文化生活』（1921年刊）において、「外国（ソ連）の煽動があったとしても、支那人がそれによってのみ動くと言う推測は的が外れて居る。」と断言しているのである<sup>(32)</sup>。

森本厚吉は本質的には教育者であった。森本は、日本は中国を対等に扱わねばならず、中国民族の能力は教育によって開発され、この国は覚醒すると確信していたのである。彼のこの中国問題認識は、孫文が森本に切々と日本政府の植民地政策の非を指摘し、日本政府への不信感を吐露したことによっているのである。森本は帰朝直後『上海青年』に、“支那及朝鮮問題に関する印象記は、時を得て公表し御批評を仰ぎ度いと思つて居りますが、兎に角「刀剣と砲弾」「強い資本と安い労力」を主として築き上げた我植民地の文化は、母国に於けると同様に、目下行き詰りになって居る事は明らかです”と誌しているのである<sup>(33)</sup>。

## 終章、森本厚吉にとっての孫文と中国

森本厚吉に思想的影響を与えた人物は、基督教では内村鑑三と新渡戸稲造であり、民主主義思想では吉野作造であり、孫文は彼に中国問題への認識を目覚めさせた人物であった<sup>(31)</sup>。森本は、孫文を評して“孫氏は稀に見る偉人であった”と語っている。森本は、孫文の言葉を当時の政情に照らして大局的に理解し、あるべき中国政策の構想を『文化生活』、『苦悶の経済生活』などの著書で披瀝し、世論の力を借りて日本政府が中国に対して速やかに友好的な行動を取ることを促しているのである。彼によると、「兵力に依つて對支問題の解決を図つた我が従来政策は確かに成功ではなかつた。我らは大いに考慮を深くして、将来我が國民活動の地であるべき支那から排斥を受けないやうにつとめねばならぬ。」と提言されているのである。森本は、日本人は中国での数々の侵略行為を恥じて、それまでの中国政策を転換して中国人民への救済政策を行うべきであると主張している<sup>(34)</sup>のである。また森本は、中国人民による排日運動の

高揚を懸念し、日本は早急に中国との間に平和条約を締結すべきであり、日本が中国で行使している、領事裁判権・外人任命権・海関及び塩税管理権は破棄すべきであるとの考えを披瀝している<sup>(35)</sup>のである。彼は『文化生活』の「はしがき」において、日本の政治を批判して「ブルジョワ主義と軍國主義で築き上げた文化が斯くも行詰りになって仕舞ふのは何も不思議な事ではありません。」と語っている<sup>(36)</sup>。

森本厚吉ほど、孫文の言葉を真摯に受けとめて日本人に中国の人民と対等の立場で向き合うように訴えた人物はないであろう。彼のいう、真の日中間の人民の「文化生活」とは両国が友好関係を樹立し、そのうえに実現されるべきものであったのである。

#### 註

- (1) 『日本キリスト教歴史大事典』（教文館、1988年）1412頁。
- (2) 藤井茂『森本厚吉』（盛岡タイムス、1997年）
- (3) 拙稿『孫文研究』30号「孫文と賀川豊彦」、36号「桂太郎と孫文との密約」についての覚書。『雲の柱』17号「賀川豊彦と中国」。
- (4) 内山完造『花甲録』（岩波書店、1960年）大正九年の条、114～115頁。
- (5) 復刻版『文化生活』（不二出版社、1995年）「私共の主張」113～114頁。
- (6) 『生長する愛の生活』（同文館、大正十三年）4頁。
- (7) 『上海青年』大正九年九月号、51頁。『上海青年』は上海日本人 YMCA の機関紙で、創刊は1920年7月。月刊誌で一冊二十銭であった。
- (8) 『上海青年』大正九年九月号、51頁。
- (9) 賀川豊彦記念・松沢記念館蔵「賀川豊彦未公刊史料」、学芸員杉浦秀典氏の御教示による。東亜同文会編『続対支回顧録』『今井嘉幸』下巻（原書房、1973年）753頁。
- (10) 段雲章編『孫文与日本史事編年』（広東人民出版社、1996年）319～322頁。
- (11) 『上海青年』1920年9月号、松村生楽「賀川氏を宿して」46～47頁。
- (12) 『苦悶の経済生活』（広文堂、昭和二年）227頁。
- (13) 『上海青年』大正九年九月号50頁。
- (14) 『苦悶の経済生活』227頁。
- (15) 『苦悶の経済生活』218頁。
- (16) 『雲の柱』18巻5号（神戸イエス団教会、1939年）。
- (17) 池田鮮『曇り日の虹—上海日本人 YMCA 年史—』（教文館、1995年）222～223頁。

- (18) 賀川豊彦編発行『新神戸・労働者新聞』1920年9月17日号「支那から帰って」(日新書房、1969年4月10日復刻版)。
- (19) 大阪府立中之島図書館所蔵、大正九年九月十六付け『大阪朝日新聞』夕刊のマイクロフィルムによる。
- (20) 『読売新聞』大正九年九月十七日号「余が会談の時にも彼(孫文)は排日を公言して憚らず、…彼(孫文)は従来日本に領土的野心なしと信じて居たるに、日清、日露両戦役及び其後の日本の行動に徴し日本に領土的野心あるを信ぜざるに至りたる。…」とある。
- (21) 『苦悶の経済生活』218頁。
- (22) 市川宏訳・戴季陶『日本論』(社会思想社、1972年) 97～100頁。
- (23) 『孫中山全集』(中華書局、1985年) 第五卷、300頁。
- (24) 『苦悶の経済生活』217頁。
- (25) 藤井昇三『孫文の研究』(劉草書房、1966年) 81頁。
- (26) 『文化生活』「私共の主張」161頁。
- (27) 森悦子「大正日日新聞と孫中山」(『孫文研究』一三号、1991年)
- (28) 『吉野作造日記』(岩波書店、1998年) 349頁。
- (29) 『文化生活』160～161頁。
- (30) 『文化生活』214頁。
- (31) 『苦悶の経済生活』228頁。
- (32) 『文化生活』216頁。
- (33) 『上海青年』「研究室より」50頁。
- (34) 『苦悶の経済生活』220頁。
- (35) 『苦悶の経済生活』218頁。
- (36) 『文化生活』「はしがき」